

巻頭言

戦後七〇年 今、よみがえる石橋湛山

現代宗教研究所長 三原正資

平成二五年（二〇一三）正月、喫茶店で、たまたま手に取った雑誌「サライ」に掲載された井出孫六氏のインタビュー記事に、石橋湛山（一八八四—一九七三）の名前を見出して、私は驚ろいた。何年ぶりだろう、立正大学を卒業以来……。指折り数え、その名前に接するのは四〇年ぶりであることに気がついた。

—今、「維新」という言葉がブームです。

「危険な兆候を感じますね。おそらく『大日本』に囚われている。戦前は軍隊によって、戦後は経済によって『大日本』を造り上げました。その宿痾から私たちは逃れられていないのですね。『大』にこだわるから、隣国とも角突き合わせることになる」

—どんな考え方をすればよいでしょう。

「かつて石橋湛山は『小日本主義』を唱えました。それに倣う必要があるんじゃないか。大を捨てて小国として生きる。『大』にこだわるから、維新をやり直し、また大国を夢想してしまふ」

「小日本」、具体的にどうすれば？

「日本はもう十分に豊かです。それに将来、人口も減るんです。軍隊でも経済でもなければ、後に残るのは文化だけでしょう。文化の質を高めていくことが、小日本への唯一の道だと思えますよ」

〔サライ〕二〇一三年一月号

長い間、石橋湛山の名前を失念していた私にとって、井出氏の湛山評価は新鮮だった。

増田弘氏（東洋英和女学院大学教授）の『石橋湛山 リベラリストの真髓』（中公新書一九九五年）には、昭和三〇年（一九五五）の石橋内閣認証式後の記念写真が掲載されている。石橋（首相）の向かって左に岸信介（外相）、右に池田勇人（蔵相）が立ち、その他、灘尾弘吉（文相）、水田三喜男（通産相）、井出一太郎（農相）など、その後、政界で活躍した人びとがいる。湛山の発病によって内閣は短命に終り、それとともに石橋湛山の名前が多くの人びとの記憶から消えていったことは残念である。

増田氏は、著書の中で湛山について述べている。

湛山は言論人とはいえ、言論にのみ止まる人物ではなかった。つまり言論と行動、理論と実践の一体化を常に心がけた人物であった。それは日蓮主義者の証であり、プラグマティストの本領でもあった。

さて、湛山は、「時評」（昭和四年二月三日号）の中で、時の内閣によって議会に提案され

た「宗教団体法案」について、次のように論評している。

こうなつては政府に諛<sup>お</sup>ねる宗教しか我国には存在出来ない。かくて在らゆる宗教は官許宗教の看板を掲げるわけである。

而も政府は、此法案に於て宗教団体所有の土地建物に種々の特権を認め、境内地還付という餌まで別に与えて、宗教家を手馴らそうとしている。之に釣られて、やれ要望決議だの、促進運動だのと騒いでいる多くの宗教家の態度はまあ宗教家の資格はないと云わねばならぬ。が、ここらが畢竟既成宗団の僧侶や教師の身上であらう。（略）

記者は、宗教家の子弟にして中等学校乃至高等学府に学ぶ者の多くに接して其の無気力無節操なるに常に呆れる。彼等は、宗教を以て商売と心得え信徒を顧客と感じ、家産相続の一つの資格として学業を修めるにすぎぬ。（『石橋湛山全集』第七卷 東洋経済新報社）

杉田日布を父とし、望月日謙の薫陶を受けた湛山のこの激論に接し、富士身延鉄道が敷かれ、中央線が甲府に来るまでは、「富士川を船で下るのが、東京または東海道方面に出る一番便利な通路であつた」時代といくらも変らないころから、既成教団の実状は、今日の如くであつたことに驚ろく。

しかし湛山は、現実の教団あるいは僧侶への不信の念とは別に、日蓮聖人への尊敬、信頼の態度に変化はなかつた。

昭和一四（一九三九）年八月、中国大陆で戦火の拡大する情勢下、社内会で宗祖を範とし

て次のように語っている。

少なくとも自分は最悪の場合に立至るとも主張は曲げませぬ。立場も変えないつもりである。一種悲壮な決心さえ懷いています。自分が鎌倉小町の日蓮上人辻説法の靈跡にお参りする毎に感ずるのは、日蓮上人のあの偉大なる不退転の決心である。

(同第一二卷五五九頁)

これは、いうまでもなく、若いころから机上にあった御遺文、開目抄の三大誓願を指す。そして、続いて、官憲の言論弾圧に対し、ジャーナリストとして社員に覚悟をうながす。

私は自分の正しいと信ずる主張、言説の為に、今後如何なる圧迫、艱難が身の上に降りかかって来ようとも、之は甘んじて受けるつもりです。(略)良心に恥ずることを書き、国の為めにならぬ事を書かねばならぬ位ならやめた方がよい。右の如く自分は覚悟している。諸君もそういう場合が来ない限りでないということを予め覚悟して欲しい。

最後に、三大誓願を列举し、「此の精神が必要である。東洋経済新報がつぶれれば、日本は亡びるのだ、という自覚があつてこそ、我々の仕事は意義があるのである」と結びところは、宗祖のことばに則ったものであり、「日蓮主義者」の面目躍如というところだろう。

ところで、戦後七〇年を期して、船橋洋一氏が『湛山読本』を東洋経済新報社から出版さ

れた。全集全一六巻から論文七〇本を抜き出した、と「読者のみなさまへ」に述べられている。その中に「われわれは「お寺」の住職」という「コラム」がある。

要するにわれわれの社の仕事は、世の営利事業と違い、いわば社会奉仕事業で、私の常に申す「お寺」であります。われわれはその「お寺」の住職であり、納所であり、あるいは小僧であります。生活は決して楽ではありません。しかし、社員一同の尽力と、その背後の家族の皆様の後援で、事業は着々と発展し、社会のために大きな貢献をなしつつあります。

〔挨拶〕 東洋経済新報社『家族会記録』、一九三五年四月三日）

世界で一番長く続いている組織、カソリック教会を、経営や組織のお手本とした経営学の著作さえある。《『シンボリック・マネージャ』(T・デイル A・ケネディー 城山三郎訳 新潮文庫 昭和六二年)》である。ここで湛山が、自らが経営する会社の手本として「お寺」を挙げたことは、彼が薫陶を受けた環境の良好さを物語っている。ところが今日では、お寺が企業コンサルタントの指導を受けている。お寺の良好な運営を企図してのこととはいえ、このような事態を招いていることに、私は一抹の不安を感じなくもない。

井出孫六氏は、湛山の小日本主義に関して、「文化の質を高めていくことが、小日本への唯一の道だと思えますよ」と述べていた。

私たち一人ひとりが仏教を学び心を豊かにして文化の質を高めていくことが、立正安国の第一歩ではなかるうか。石橋湛山は、私たちに、そのように望んでいる、と私は考えている。